

古事記

A decorative border with floral motifs at the corners and a vine-like pattern with leaves and small flowers along the edges.

新潮日本古典集成

古 事 記

西宮一民 校注

新潮社版

新潮日本古典集成 (第二七回)
古事記



定価二二〇〇円

昭和五十四年六月十日 発行
昭和六十三年二月十五日 七刷

校注者 西宮一民

発行者 佐藤亮一

印刷所 大日本印刷株式会社

発行所 株式会社 新潮社

〒一六二 東京都新宿区矢来町七一
電話 東京 03 (二六六) 五一一一 (業務)
東京 03 (二六六) 五四一一 (編集)
振替 東京 四一八〇八

装画 佐多芳郎
組版 シーティエス大日本
製本 加藤製本株式会社

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えます。

© Kazutami Nisimiya, Printed in Japan, 1979.

ISBN4-10-620327-8 C0393

目次

凡例	九
上つ巻	一七
中つ巻	一〇八
下つ巻	二〇四
解説	二七三
付録	
神名の釈義 付索引	三三九

上つ巻

序第一段

稽古照今……………七

序第二段

天武天皇と帝紀・旧辞の撰録……………元

序第三段

元明天皇と『古事記』の完成……………三

創世の神々

五柱の別天つ神……………六

神世七代……………六

伊耶那岐命と伊耶那美命

国作りの命を受ける……………七

淤能基呂島での聖婚……………六

水蛭子と淡島を生む……………元

日本列島を生む……………三

神々を生む……………三

火神を生み伊耶那美命死ぬ……………四

伊耶那岐命、火神を斬る……………五

伊耶那岐命、黄泉国を訪問する……………六

伊耶那岐命、黄泉国を脱出する……………六

人間の生死の起源……………元

伊耶那岐命、禊をする……………四

三貴子の誕生と分治……………四

須佐之男命の異端性……………四

天照大御神と須佐之男命

須佐之男命の昇天……………五

天の安の河の誓約……………六

須佐之男命の勝さび……………四

天照大御神の天の石屋戸ごもり……………五

五穀の起源……………五

須佐之男命の大蛇退治

八俣の大蛇……………五

八俣の大蛇を退治し草薙の剣を得る……………五

須賀の宮と八雲神詠歌……………六

須佐之男命の子孫……………五

大國主神の事績

稲羽の素戔	五
大穴牟遲神の受難	六
根の国での試練を克服	三
大國主神として国作りをする	三
八千矛神、沼河比売に求婚	六
須勢理毗売の嫉妬と和解	六
大國主神の子孫	三
大國主神、少名毗古那神の協力を得て国作りを進める	三
大國主神、御諸山の神を祭る	五
大年神の子孫	六
葦原の中つ国のことむけ	
天の菩比神の派遣	七
天の若日子の派遣	六
天の若日子の叛逆	六
天の若日子の死	八
建御雷神の派遣	三
事代主神の服従	四

建御名方神の服従……………八五

大國主神の国譲り……………八六

天孫日子番能邇邇芸命

天孫の誕生と降臨の神勅……………八八

猿田毗古神の先導……………八九

天孫の降臨……………九〇

天の宇受売命と猿田毗古神……………九三

木花之佐久夜毗売との聖婚……………九三

日子穗々手見命

海幸彦と山幸彦……………九六

海宮訪問……………九六

火照命の服従……………一〇一

鵜葺草葺不合命

その御子たち……………一〇四

中つ巻

神武天皇

東 征……………	二〇八	皇 統 譜……………	二六六
五瀬命の戦死……………	二一〇	孝安天皇……………	
熊野の高倉下の献剣……………	二一一	皇 統 譜……………	二六六
八咫鳥の先導……………	二一三	孝靈天皇……………	
宇陀での戦勝……………	二一四	皇 統 譜……………	二六七
忍坂での戦勝……………	二一六	孝元天皇……………	
登美毗古を攻撃……………	二一七	皇 統 譜……………	二六八
兄師木・弟師木を攻撃……………	二一八	開化天皇……………	
邇芸速日命の服従と伊波礼毗古命の即位……………	二一九	皇 統 譜……………	二七〇
皇后の選定……………	二一九	崇神天皇……………	
当芸志美々命の謀反……………	二二三	皇 統 譜……………	二七三
綏靖天皇……………		三輪山の神を祭る……………	二七四
皇 統 譜……………	二二四	三輪山伝説……………	二七六
安寧天皇……………		建波邇安王の反逆……………	二七七
皇 統 譜……………	二二四	垂仁天皇……………	
懿德天皇……………		皇 統 譜……………	二八〇
皇 統 譜……………	二二五	沙本毗古王の反逆……………	二八三
孝昭天皇……………		沙本毗古攻略と御子出生……………	二八五
		御子の養育と後宮問題……………	二八七

啞の本牟智和氣の御子……………一四

出雲の大神を拝む……………一四

天皇、丹波の四王女を召す……………一五

多遲摩毛理、橘を求める……………一五

景行天皇

皇統譜……………一五

大碓命の不実……………一五

小碓命、兄を殺す……………一五

倭建命の熊曾建征伐……………一七

倭建命の出雲建征伐……………一六

倭建命の東国征伐……………一六

倭建命、尾張・相模の賊を平定……………一三

倭建命、后弟橘比売命を失う……………一三

倭建命、足柄の神を殺す……………一四

倭建命、甲斐で筑波問答……………一五

倭建命、美夜受比売と聖婚……………一五

倭建命、伊吹山で困惑する……………一七

倭建命、望郷の歌を残し病死……………一六

倭建命、白千鳥となり天翔る……………一七

倭建命の系譜……………一七

成務天皇

皇統譜……………一七

仲哀天皇

皇統譜……………一七

神功皇后の神懸り……………一四

仲哀天皇の崩御と神託……………一五

神功皇后の新羅親征……………一七

応神天皇の聖誕……………一七

香坂王・忍熊王の反逆……………一七

太子と角鹿の氣比の大神……………一八

神功皇后、太子に献酒……………一八

応神天皇

皇統譜(一)……………一八

三皇子に任務の分担を命ずる……………一八

矢河枝比売との聖婚……………一八

大雀命に髪長比売を与える……………一九

吉野の国主等の讃歌……………一九

文物の渡来……………一九

大山守命の反逆……………	一五三
宇遲能紀和紀郎子の死……………	一六六
天之日矛とその子孫……………	一七七
天之日矛の神宝異聞……………	二〇〇
皇統譜(二)……………	二〇三

下つ巻

仁徳天皇

皇統譜……………	二〇四
御名代の設置……………	二〇五
聖帝の御世……………	二〇五
黒日売と皇后の嫉妬……………	二〇六
八田皇女と皇后の嫉妬……………	二〇八
皇后へ和解の遣使……………	二一〇
皇后訪問のため綴喜に行幸……………	二二三
天皇の八田皇女への愛……………	二二三
女鳥王と速総別王の反逆……………	二二四

雁の卵の瑞祥……………	二二七
枯野の琴の瑞祥……………	二二八
履中天皇……………	

皇統譜……………	二二九
----------	-----

墨江中王の反逆……………	二二九
--------------	-----

水歯別命の智略……………	二三一
--------------	-----

水歯別命、下手人の隼人を誅す……………	二三三
---------------------	-----

天皇の事績……………	二三四
------------	-----

反正天皇

皇統譜……………	二三五
----------	-----

允恭天皇

皇統譜……………	二三五
----------	-----

即位と氏姓の正定……………	二三六
---------------	-----

軽太子の密通……………	二三七
-------------	-----

軽太子捕われる……………	二三八
--------------	-----

軽太子、伊予に流される……………	二三〇
------------------	-----

衣通王、太子を追い心中する……………	二三二
--------------------	-----

安康天皇

大日下王を殺害……………	二三三
--------------	-----

目弱王、天皇を殺害……………三二四

大長谷王の忿怒……………三二五

大長谷王、目弱王を滅ぼす……………三二六

大長谷王、忍歯王を殺害……………三二七

忍歯王の遺児の流離……………三二九

雄略天皇

皇統譜……………三三九

若日下部王を妻問う……………三四〇

赤猪子の節操……………三四三

吉野の童女との聖婚……………三四五

阿岐豆野の遊獵……………三四六

葛城山の遊獵……………三四七

一言主神との出会い……………三四七

袁杼比売を妻問う……………三四九

三重の姦の天皇讃歌……………三四九

袁杼比売の天皇讃歌……………三五三

清寧天皇

皇統譜……………三五四

二皇子の発見……………三五五

袁祁命と志毗臣の闘歌……………三二五

二皇子、志毗臣を誅戮……………三二六

二皇子、即位を互讓……………三二六

顯宗天皇

皇統譜……………三二九

父王の遺体埋葬……………三二九

報復の道義……………三六一

仁賢天皇

皇統譜……………三三三

武烈天皇

皇統譜……………三三四

繼体天皇

皇統譜……………三三四

安閑天皇

皇統譜……………三六六

宣化天皇

皇統譜……………三六六

欽明天皇

皇統譜……………三六七

敏達天皇

皇統譜

二六

用明天皇

皇統譜

二七

崇峻天皇

皇統譜

二八

推古天皇

皇統譜

二九

凡 例

本書は、いわゆる和銅奏覧本（太安萬侶本）『古事記』が記述した言語と意図した内容とを復原することにつとめ、日本最古の古典である『古事記』を、現代の読者に最も正確にまたより理解しやすい形で伝えるための橋渡しをしようとしたものである。校注に当っては、先入観を排して虚心に読み、すべて『古事記』をして語らしめる態度を取った。

〔本文〕

一、まず、最善本である真福寺本を底本とし、他本による校訂をなし、和銅奏覧本に近づき得たと思われる「原文」を最初に構築した。ついで、このすべて漢字で記された「原文」に段落を設け、改行を加え、可能な限り奈良時代語で訓み下した漢字仮名交り文（歴史的仮名づかい）をもって、本書の本文とした。ただし、原文と訓み下し文に至る考証はすべて省いた。訓法一般については「解説」（三〇八頁）を参照されたい。

一、原文の注記類のうち、「訓注」（その文字の訓法を記した注記）、「本文注」（本文の一部が注記の形式となっている部分）および「説明注」（本文中の計数注・語注の類）は、本文と一体不可分の関係にあるために、これを生かし、「声注」（アクセントの注記）と「音注」（その文字が音仮名であることを示す注

記」とは省いた。

(例) 訓 注——塩しほをろこをろに書き鳴なし(鳴を訓みてナシといふ)

本文注——上の件かみくんだりの五柱ごちゅうの神は、別天ことあまつ神ぞ。

説明注——「その目は赤かがちのごとくして、(下略)」(ここに赤カガチといへるは、今の酸醬はなごぞ)

一、本文の漢字は通行字体を用いたが、当時の文字使用上の特色を残していると思われる「古字」の類は温存した。

(例) 相(想)・或(惑)・成(盛)・箇(簡)・適(嫡)・呉公(蜈蚣)

一、同一固有名詞の表記に相違のある場合がままあるが、原文どおりとする。

(例) 伊耶那岐の命・伊耶那伎の命、帶日子国忍人の命・帶日子国押人の命

一、本文を読みやすくするために、次の点を考慮した。

- 1 固有名詞を除く音仮名は平仮名に変えた。ただし「訓注」の音仮名は片仮名に変えた。
- 2 代名詞・副詞・接続詞の文字、および「有・無・為・如・云」の文字は殆ど平仮名に変えた。
- 3 振り仮名は、原則として見開き頁の初出に歴史的仮名づかいで付した。

- 4 会話文は、「」に入れ、改行一字下げとした。

- 5 歌謡は、通行字体による漢字仮名交り文に改め、長歌は五音・七音の単位ごとに改行し、二字

下げとした。

6 「序」(上巻冒頭に冠せられた漢文体)は、対句^{つひく}に従って改行した。

7 原文二行の割注は、()内に七ポイント活字で一行に改めた。

〔傍注〕

一、傍注は、口語訳を当てる。この口語訳だけで本文(原文)のニュアンスを感じとり、また通読できることを理想とした。また振り仮名が多い性質上、本文と口語訳との対応は困難を極めたが、安易な意識を却^{しりぞ}け、こなれた逐語訳の実現に努力をした。

一、「序」は上表文^{じょうひょうぶん}(天子に申し上げる文章)なので、口語訳は「です・ます」体を基調とし、本文は会話を除き「である」体(スペースの都合で、まれに「だ」体)を基調とした。

一、現代語で、自分に敬語をつけて言うことはないが、上代では尊貴の人の物言いとして「自敬表現」がある。口語訳としては奇異であるが、その語り口を残すことにした。

一、本文にない言葉を補った場合は「」を付した。

一、傍注は、色刷りにした。

一、傍注欄の漢数字は、頭注欄の漢数字と対応する。

〔頭注〕

一、「見出し」(色刷り)は「大見出し」と「小見出し」とに分れる。「大見出し」は、「序」段・神話

（上巻）の主人公名による各段、人皇巻（中・下巻）の天皇名による各段とし、「小見出し」は、上掲の各段の細目による各条とする。『古事記』を説話の集合体と見ず、構想をもった全一体と見る立場からの「見出し」とした。

一、*印は、各段・各条の要旨、その説話や歌謡の意味する内容、文脈上の照応、これまでの問題点などについての説明を施したものである。

一、本文の漢数字に対応する頭注漢数字は見開き頁に収め、理解の便を図るための、語釈・文法の説明および作歌事情・説話背景・文章表現などの解説を旨とし、特に歌謡については、独立歌的解釈よりも本文と密着した理解と鑑賞に導くための解説に努めた。

一、『古事記』の理解のためには、文脈中の神名の解釈は不可欠であると考えるが、スペースの都合で詳しい考察は「付録」に譲った。

一、頭注記述上の形式的な事項は次のとおりである。

- 1 頭注の用字は通行字体を用いる。それは、本文を引用する場合も同じ。
- 2 本文の語句を引用する場合、本文の平仮名を正訓字に、また正訓字を平仮名に変えることがある。語釈を簡便化するためである。

（例） さずき ↓ 棧敷、和平す ↓ やはす

- 3 本文の神・人名は「某の神・命」と「の」を記しているが、頭注では「某神・命」のように「の」の表記を省いた。スペースの都合によるもので、読むときは「の」を読み添える。国名も

同じで、本文に「某の国」とあっても頭注では「某国」と記す。ただし誤読のおそれのある語彙を、「黄泉国・常世国・現し国・中つ国」と記した場合がある。

4 地名は、可能な限り現地の呼称に従う。ただし「町」は、「ちょう」か「まち」かゆれているものもあるので、その読みを省いた。

5 頭注の振り仮名は現代仮名づかいとする。ただし、本文の引用、他の原文の引用、漢文の訓読、また語義の説明に必要と認めた場合は歴史的仮名づかいとする。

6 文献名は『』で示すが、略称を用いることがある。

(例) 『古事記』→記、『日本書紀』→紀

『出雲国風土記』→『出雲風土記』、『和名類聚抄』→『和名抄』

7 文献の細目を示す場合、可能な限り詳細に記したが、この場合にも略称を用いることがある。

(例) 『日本書紀』崇神天皇十年九月九日→崇神紀十年条

『日本書紀』安康天皇元年二月→安康紀

『日本書紀』顕宗天皇即位前→顕宗前紀

〔解説〕

現『古事記』成立の経緯を明らかにし、作品のもつ特質と意義について解説を加え、併せて、訓法

一般の原則とその実例とを掲げた。

〔付録〕

『古事記』に現れる神名を、上巻の神話系列を中心に初出順に掲げ、その名義を記し解説を施した。